

附記して置く。何分識者の教えを仰ぎたいところである。

十三 砥石（といし）

人造のものが多くなつた今では、自然石の砥石も少くなつたが、昔はみな溪谷や山から切出したもので、どこにもその丁場となる砥石山があつて、地方の特産品となつていた。

砥石となる岩石は、砂岩、頁岩、粘板岩、凝灰岩のような堆積岩が多く、それも質が均一的のもので、余り堅くてもいけない。そういう条件が必要なのである。讃岐では「野間田砥」というのが知られていた。

明治初年の新撰讃岐風土記（松岡調氏）に「寒川郡野間田村の大蜂山から出る。世間ではこれを沼田砥という」と欠かれているのがそれだ。

野間田村は、造田村になり、今は長尾町に属している。この砥石を出す、大蜂山、

地質が凝灰岩からなっているが、色は白っぽくて緻密な石質で、刀剣を研ぎ、磨くにも適していた。

それで、高松の殿様は、この山を藩の直営とし、砥石の採石に当らせていた。つまり、藩営の採石場として知られていたところである。

明治になって村有となったが、その後石も少く中絶してしまったという。火成岩の多い讃岐平野の山々なので、火山性堆積岩である、凝灰岩も多いが、多くは集塊岩質で、粗粒の混在するものが多くて、砥石となるものは稀である。野間田の白色の柔かい砥は、凝灰岩というよりは、播磨の作用砥、肥後の天草砥のように石英粗面岩（流紋岩）のなかば風化して、軟質になったものと似て質はすぐれていた。

石英粗面岩というのは、花崗岩質マグマの外部に流出した火山岩で、一見白っぽい堆積岩に見誤られる均質細粒の岩石で、よく凝灰岩と誤れ易い性格がある。

全国的にも名の知られた天草砥にしても、凝灰岩とする人があったり、石英粗

面岩と書いている人もあるぐらいで、両者の区別はむつかしい。野間田砥もそれに似ている石質のものである。

砥を出す山を砥石山と通称する例が多いが、讃岐では砥石山の名のつく山が塩江にある。それにここでは、砥石峠や砥石谷など、砥石にまつわる地名が残っている。「安原記」や「塩江雑記」に、塩江にある斧磨キワリトギという地名の伝説を載せている。

弘法大師が、この地で人々に斧をとぐことを教えたので、斧磨の地名がつき、このあたりはみな砥石になった……というのだ。

一体、塩江附近は、地質的に、南の花崗岩地帯と南方の和泉砂岩層群の接触地域で、奥の山には砂岩や、その間に挟まれた粘土質の頁岩があり、軟質になった黒い頁岩を、土地の人々は古くから鍋土ナベツチと呼んでいる。

色が黒くて鍋の尻のように黒いから名づけたのか、それとも鍋磨きに用いたところからきたのか——一考を要するところだが、ともかく、頁岩が砥石として使わ

れていたこともうなづけるのである。

昔といつても、流通の進んだ江戸時代には、京の鳴滝砥、大和の春日砥、紀州の神子砥ミコド石近くは白っぽい伊予砥イヨト○などが出廻っていても、奥地の百姓や山人もは、幸いというのか砥にも使用出来る、阿讃山地の堆積岩があるので、或はそれを拾って使用したことでもあろう。

十四 硯石

硯石も砥石に似て、堆積岩が多く使用されるが、砥石よりも質が堅いのがよいとされる。京の鳴滝石は上等の砥石で、古くは公方様方の刀をといだものだが、硯石としても使用された。硯は砥石が刀剣刃物を磨くのと異って、何分にも文人墨客が愛好するものだけに、各自の趣向もあつて随分各地の名石というものを、どんどん利用して作っている。したがって、全国的には硯石の名は随分と多いも